

# 文化審議会の指針に基づく日本語教師課程の成果と課題 —履修生を対象とするアンケート調査から—

滑 川 恵理子

## 1. はじめに

2019年(令和元年)は日本語教育にとって節目の年となった。全世界的なグローバル化の進展に相まって国内外で日本語学習者の増加傾向が続き、日本語教育の進展と質の向上への期待が高まる中、2019年6月「日本語教育の推進に関する法律」が公布、施行された。これは日本語教育に関する初の法律である。また日本人人口の少子高齢化に伴う労働人口の減少に対応するための方策の一つとして、2019年4月、入国管理法が改正され在留資格「特定技能」が創設されるなど、外国人労働者をめぐる法律でも動きがあった。

日本語教育に関する統計から見ても、2019年是一个の節目となった。近年言語的文化的背景の異なる人々が続々と日本にやって来るようになったことは言うまでもないが、2019年末、在留外国人数が293万3,173人に達し、過去最高を記録した<sup>1)</sup>。これは総人口に対して約2.4%を占める。それに歩みを合わせ、国内の日本語学習者数(277,857人)<sup>2)</sup>と留学生数(312,214人)<sup>3)</sup>においても2019年は過去最高を記録した。翌2020年(令和2年)は新型コロナウイルスの蔓延により様相が一変したため、結果的に一つのピークを形成することとなった。

こうした中、京都女子大学(以下「本学」と称する)は、2020年(令和2年)4月日本語教師課程(大学副専攻26単位)を新規開講した。本学では社会の変化と大学における国際化戦略、また近年の学生たちの資格取得に対する

ニーズに対応すべく、かねてから日本語教師課程の創設が提案、討議されていた。しかし、なかなか学内の総意がまとまらず、2018年度に文化庁委託事業（文化庁日本語教育人材養成・研修カリキュラム等開発事業）の採択を得るに及んでようやく実現した。そして委託事業1年目の2019年度に開講準備に着手し、2年目の2020年（令和2年）4月に開講した。本学における日本語教師課程の新規開設は、社会の多言語化多文化化に伴う要請に呼応し得る、まさに時宜にかなったものと言える。

このように文化庁委託事業としてスタートしたことから、本学の日本語教師課程は、当然ながら文化庁が提示する最新の日本語教育に関する指針に基づいてカリキュラムが作成されている。具体的には文化審議会国語分科会が発表した「日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改訂版」（文化審議会国語分科会，2019）（以下「報告」と称する）に基づく。この「報告」については、2018年に初版が発表されて以来、さまざまな立場からその妥当性や可能性などについて議論されている。例えば義永（2020）は、2018年に発表された初版「報告」に至るまでの日本語教師の資質・能力観の変遷を整理し、その課題を提起した。義永（2020）は、「報告」で示された資質・能力が新しい時代の教師の能力観をどのように反映しているのかを明かしつつ、資質・能力の捉え方や教育方法が要素主義に陥る可能性を指摘した。また杉本・松岡（2021）は、大学の日本語教師課程で行なわれたプロジェクト・ワーク型日本語教育実習が「報告」で示された資質・能力をどのように養成できたかを分析した。その教育実習は、「報告」で示された資質・能力のうち、【技能】の項目すべてと、【態度】の7項目のうち5項目が養成できる機会となっていたという<sup>4)</sup>。

文化審議会国語分科会による「報告」は、言うまでもなく日本語教育人材の育成に関する国としての指針そのものである。新たな時代に向かう日本語教師養成の在り方を探求するため、特に教師養成を実際に行っている教育機関を対象に実証的研究を行い、その妥当性や可能性を検討するとともに課題を見出すことが必要であると考ええる。

そこで本稿では、京都女子大学日本語教師課程の履修生を対象にアンケート調査を行い、「報告」で示された資質や能力をどの程度養成・修得することができたかを検討することを目的とする。そしてその検討を踏まえ、「報告」に基づく本学日本語教師課程の妥当性や可能性、および課題について考察する。

## 2. 研究方法

ここでは、2.1として、まず本調査の前提となる「報告」で示された資質・能力がどのような変遷を経て、どのような特徴をもっているのかについて述べる。続いて、2.2として「報告」における資質・能力を踏まえて、アンケートの設問をどのように作成したのかを述べる。そして、2.3として、アンケート調査の概要と分析方法について述べる。

### 2.1 「報告」で示された資質・能力とは

日本語教師養成について初めて標準的な教育内容が示されたのは、1985年（昭和60年）に文部省（当時）に設けられた調査委員会が報告した「日本語教員の養成について」においてであった。ここでは日本語教育の専門家として必要とされる6つの「知識・能力」が挙げられた。そしてこれらの「知識・能力」を育成するためには、一般の日本語教員養成機関では420時間、大学学部主専攻で45単位、大学学部副専攻で26単位、大学院修士課程で24単位のコースが必要であると明記され、今日も続く日本語教員養成の基本的な指針となった。

その後、在留外国人や日本語学習者の増加、ニーズの多様化等の社会状況の変化を踏まえ、2000年（平成12年）には、文科省の「日本語教員の養成に関する調査研究協力者会議」において「日本語教育のための教員養成について」が取りまとめられた。その特徴として、日本語教育の根底にあるものは「コミュニケーションである」と明記したことが挙げられる。言語教育が目指すものを、個々人の心理内における発達のみではなく、人と人との間に生まれる動

態的な現象として捉えたのである。

そして2018年（平成30年）、文化審議会国語分科会は「日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）」を発表した。本学ではこの「報告」の翌年に発表された「改訂版」に基づき日本語教師課程を設置した。特徴は、日本語教育人材を活動分野（留学生に教える、児童生徒に教える等）、役割（ボランティア、日本語教師、日本語教育コーディネーター）、段階（養成、初任、中堅）の3つのカテゴリーで整理したこと、日本語教育人材に求められる（ボランティアに対しては「望まれる」）資質・能力として、「知識・技能」に加えて「態度」が明記されたことなどである。「態度」を「知識・技能」と並ぶ資質・能力と捉えていることが注目されるが、このような資質・能力観が提唱されるようになった根拠として、義永（2020）は「ポスト近代型能力」とも呼ばれる新しい能力「コンピテンシー」の考え方があると指摘する。このコンピテンシーについて、松尾（2017）は、近年の能力観の変化を、従来の情報処理能力としてリテラシーの概念から、スキル、さらに態度を含む人間の全体的な能力を捉えるコンピテンシーの概念へと焦点が移行していったと述べる（松尾2017, p.12）。グローバル化による価値観の多様化や変化のスピードが加速する現代社会において、「人間の全体的な能力」を捉えるコンピテンシーの概念を日本語教育人材の育成にも援用していることは注目に値する。

この「報告」に照らし合わせると、本学の日本語教師課程は、役割としては3つのうちの「日本語教師」、3つの段階の中では「養成」の位置付けで、留学生や児童生徒などに対する広範な活動分野で活躍する日本語教師を養成することが目指される。

そこで「報告」に示された「日本語教師（養成）に求められる資質・能力」（文化審議会国語分科会, 2019, p.24）を見てみよう。多岐にわたる項目が「知識」「技能」「態度」の3つのカテゴリー別に掲げられているが、ここでは上で述べた「態度」〈表1〉に着目する。本調査のアンケートで履修生に養成されたかどうかを検討するのは「(2)日本語そのものの知識だけでなく、歴史、文化、社会事象等、言語と切り離せない要素を合わせて理解し、教育実践に活か

そうとする。」(以下、下線と網掛けは筆者による)、「(3)日本語教育に関する専門性とその社会的意義についての自覚と情熱を有し、自身の実践を客観的に振り返り、常に学び続けようとする。」「(4)言語・文化の相互尊重を前提とし、学習者の背景や現状を理解しようとする。」「(6)異なる文化や価値観に対する興味関心と広い受容力・柔軟性を持ち、多様な関係者と連携・協力しようとする。」の4つである。

〈表1〉 日本語教師（養成）に求められる資質・能力 （文化審議会2019）

態度
<b>【1 言語教育者としての態度】</b>
(1)日本語だけでなく多様な言語や文化に対して深い関心と鋭い言語感覚を持ち続けようとする。
(2)日本語そのものの知識だけでなく、歴史、文化、社会事象等、言語と切り離せない要素を合わせて理解し、教育実践に活かそうとする。
(3)日本語教育に関する専門性とその社会的意義についての自覚と情熱を有し、自身の実践を客観的に振り返り、常に学び続けようとする。
<b>【2 学習者に対する態度】</b>
(4)言語・文化の相互尊重を前提とし、学習者の背景や現状を理解しようとする。
(5)指導する立場であることや、多数派であることは、学習者にとって権威性を感じさせることを、常に自覚し、自身のものの見方を問い直そうとする。
<b>【3 文化多様性・社会性に対する態度】</b>
(6)異なる文化や価値観に対する興味関心と広い受容力・柔軟性を持ち、多様な関係者と連携・協力しようとする。
(7)日本社会・文化の伝統を大切にしつつ、学習者の言語・文化の多様性を尊重しようとする。

一見「日本語を教える」という職務とは直接関係しないような態度が並ぶ。しかし特に下線で示した部分からは日本語教師という仕事が単に日本語を教えるという職務に止まらない、深く広範な社会的な意義をもつ職業であることが分かる。知識を伝授するという従来の教師像に収まらない豊かな人間性をもって、権威的な存在としてではなく「人として向き合う」ことや、他者とのつな

がりを構築する力、さらに学び続ける姿勢が問われているのである。まさに、上述の「人間の全体的な能力としてのコンピテンシー」（松尾, 2017）に通底すると言えるだろう。本学の日本語教師課程履修生がこうした「態度」を身に付けることができるかどうかは、変化が著しく、ますます複雑化する今日の社会において意義深いことであると考えられる。

## 2.2 「報告」における資質・能力とアンケートの設問の対応

〈表2〉〈表3〉は、本稿のアンケートの設問を作成するに当たり、「報告」で示された資質・能力をどのように参照したのかを示している。まず〈表2〉は、対象となる科目のうち「日本語教育入門」についてのアンケートの【設問3】から【設問9】についての対応である。ここでは、「報告」における「資質・能力」の中で【知識】(2)(10)(11)、【技能】(9)、【態度】(2)(4)(6)が「日本語教育入門」の授業で養成すべきものということになる。

設問の表現について述べる。例えば、「資質・能力」のうち「【知識】(2) 個々の学習者の来日経緯や学習過程等を理解する上で、必要となる知識を持っている」について、その知識が修得できたかどうかを問う設問として、「【設問3】「海外の日本語教育事情」（第2回）や「国内の日本語教育事情」（第3回）の講義を通して、個々の学習者の来日経緯や背景を理解するための知識を修得することができた。」を作成した。下線部で示したように、その知識が修得されたかどうかを直接調べられるような表現を用いた。また【技能】に関わる設問では、「【技能】(9) 学習者の理解に応じて日本語を分かりやすくコントロールする能力を持っている。」について、「【設問7】「やさしい日本語」の講義（第11回）とワークショップ（第13, 14回）を通して、学習者の理解に応じて日本語を分かりやすくコントロールする能力を修得することができた。」といった表現を用いた。さらに【態度】については、「【態度】(2) 日本語そのものの知識だけでなく、歴史、文化、社会事象等、言語と切り離せない要素を合わせて理解し、教育実践に活かそうとする。」に対し、その態度が涵養されたかどうかを問う設問として、下線部で示すように、【設問6】「日本語教育

史」(第6, 7回)や授業全体を通して、日本語そのものの知識だけでなく、歴史、文化、社会事象等、言語と切り離せない要素を合わせて理解し、教育実践に活かそうと考えるようになった。』といった表現を用いた。

また、履修生が具体的な授業を思い出して回答できるように、設問の最初に「海外の日本語教育事情」(第2回)や「国内の日本語教育事情」(第3回)の講義を通して」のように該当する授業回を明示した。設問の順番は授業回の順番に準じた。

〈表2〉「日本語教師【養成】に求められる資質・能力」(文化審議会2019)とアンケート設問の対応表①「日本語教育入門」

【養成】に求められる資質・能力	日本語教育入門／アンケート設問
【知識】(2) 個々の学習者の来日経緯や学習過程等を理解する上で、必要となる知識を持っている。	【設問3】「海外の日本語教育事情」(第2回)や「国内の日本語教育事情」(第3回)の講義を通して、個々の学習者の来日経緯や背景を理解するための知識を修得することができた。
【知識】(10) 外国人施策や世界情勢など、外国人や日本語教育を取り巻く社会状況に関する一般的な知識を持っている。	【設問4】「国内の日本語教育事情」(第4, 5回)の講義を通して、外国人施策や世界情勢など、外国人や日本語教育を取り巻く社会状況に関する一般的な知識を修得することができた。
【知識】(11) 国や地方公共団体の多文化共生及び国際協力、日本語教育施策に関する知識を持っている。	【設問5】「国内の日本語教育事情」(第3, 4, 5回)や「多文化共生」(第11回)の講義を通して、国や地方公共団体の多文化共生及び国際協力、日本語教育施策に関する知識を修得することができた。
【態度】(2) 日本語そのものの知識だけでなく、歴史、文化、社会事象等、言語と切り離せない要素を合わせて理解し、教育実践に活かそうとする。	【設問6】「日本語教育史」(第6, 7回)や授業全体を通して、日本語そのものの知識だけでなく、歴史、文化、社会事象等、言語と切り離せない要素を合わせて理解し、教育実践に活かそうと考えるようになった。

【技能】(9) 学習者の理解に応じて日本語を分かりやすくコントロールする能力を持っている。	【設問7】「やさしい日本語」の講義(第11回)とワークショップ(第13,14回)を通して、学習者の理解に応じて日本語を分かりやすくコントロールする能力を修得することができた。
【態度】(4) 言語・文化の相互尊重を前提とし、学習者の背景や現状を理解しようとする。	【設問8】授業全体を通して、言語・文化の相互尊重を前提に、学習者の背景や現状を理解するようになった。
【態度】(6) 異なる文化や価値観に対する興味関心と広い受容力・柔軟性を持ち、多様な関係者と連携・協力しようとする。	【設問9】授業全体を通して、異なる文化や価値観に対する興味関心をもつようになった。

次に〈表3〉は、対象となる科目のうち「言語と教育」についてのアンケートの【設問7】から【設問12】についての対応である。「言語と教育」では、「報告」における「資質・能力」の中で、【知識】(3)(8)、【技能】(4)(6)(9)、【態度】(3)を養成する。指導法を学ぶ科目であるため、技能に関わる項目が比較的多い。設問にどのような表現を用いたのかは、「日本語教育入門」と同様である。

〈表3〉「日本語教師【養成】に求められる資質・能力」(文化審議会2019)とアンケート設問の対応表②「言語と教育」

【養成】に求められる資質・能力	言語と教育／アンケート設問
【態度】(3) 日本語教育に関する専門性とその社会的意義についての自覚と情熱を有し、自身の実践を客観的に振り返り、常に学び続けようとする。	【設問7】「日本語教師という仕事」(第2回)の講義を通して、日本語教育および日本語教師に関する専門性とその社会的意義について理解することができた。
【知識】(3) 日本語教育プログラムやコースにおける各科目や授業の位置付けを理解し、様々な環境での学びを意識したコースデザインを行う上で必要となる基礎的な知識を持っている。	【設問8】「コースデザイン」(第3回)の講義を通して、目的・目標に沿った授業を計画・実行するためのコースデザインに関する知識を修得することができた。



【知識】(8) 学習者の日本語能力を測定・評価する上で必要となる知識を持っている。	【設問9】「言語能力の評価方法」(第4回)の講義を通して、学習者の日本語能力を測定・評価するために必要となる知識を修得することができた。
【技能】(6) 授業や教材等を分析する能力があり、自らの授業をはじめとする教育活動を振り返り、改善を図ることができる。	【設問10】「教科書分析」(第5, 7, 8回)の講義を通して、主教材を分析し、学習者に応じた内容の主教材を選択するために必要となる知識と技能を修得することができた。
【技能】(4) 学習者に応じた教具・教材を活用または作成し、教育実践に生かすことができる。	【設問11】「リライト教材」(第10回)、「教材作成」(第12, 13, 14回)の講義を通して、学習者に応じた教材を活用または作成することができるようになった。
【技能】(9) 学習者の理解に応じて日本語を分かりやすくコントロールする能力を持っている。	【設問12】「リライト教材」(第10回)や「教室談話分析」(第11回)の講義を通して、学習者の理解に応じて日本語を分かりやすくコントロールする能力を修得することができた。

## 2.3 アンケート調査の実施概要と分析方法

アンケートは、日本語教師課程必修科目6科目のうち、筆者が担当する2科目「日本語教育入門」と「言語と教育」の履修生を対象に、学内のwebシステム「LMS」のアンケート機能を利用して行った。

回答方式は無記名で、「日本語教育入門」では全部で11の設問、「言語と教育」では14の設問<sup>5)</sup>を設定した。設問1は調査の趣旨説明に対して同意してもらえるかどうか、設問2は所属学部・学科、それ以降「資質・能力」に関する選択肢回答の質問が続き、最後の2つは自由記述回答(「全ての授業の中で特に印象に残った内容などがかったら書いてください」「この授業で改善した方がよいと思ったことなどがあったら教えてください」とした。

「資質・能力」に関する設問については5段階「非常にそう思う／そう思う／どちらでもない／そう思わない／全くそう思わない」から一つを選んでも

らった。この5段階による回答は、本学で毎学期末に全ての授業を対象にLMSを通じて行っているアンケート調査で採用されているものと同じである。同じものを使用した方が、履修生にとって馴染みがあるため勘違いやトラブルを避けられると考えたからである。

そして調査は、2021年度前期授業の最終回の授業中に実施し、ほぼ全員が時間中に回答した。ただし、「日本語教育入門」水曜日クラスでは当日教務課関係のトラブルが発生したため、後日回答するかたちとなった。

「日本語教育入門」の履修生からは54名の回答を得た。令和3年度前期の「日本語教育入門」は、水曜日6講時と木曜日6講時の2クラスが行なわれ、計69名が履修登録し、64名が最後まで履修した。最後まで履修した64名のうち回答者が54名とやや少なかったのは、上述のように水曜日クラスでアンケートを実施した最終回にトラブルが発生し、後日回答するかたちになってしまったからである。

もう一つの「言語と教育」の履修生からは23名の回答を得た。令和3年度前期の「言語と教育」は金曜日6講時に行なわれ、計24名が履修登録し、全員が最後まで履修した。24名のうち1名を除いた23名がアンケートに協力してくれた。

分析に当たっては、選択形式による回答の分析を主とするが、自由記述回答も補足データとして活用する。

### 3. 分析

#### 3.1 「日本語教育入門」履修生に対するアンケート結果

〈表4〉①②は、「日本語教育入門」の履修生を対象とする「資質・能力」に関するアンケートの結果である。「非常にそう思う／そう思う／どちらでもない／そう思わない／全くそう思わない」の5段階で一つを選んでもらったところ、「非常にそう思う／そう思う」に回答がほぼ集中し、「どちらでもない」は少なく（【設問7】で3つ、【設問3】で2つ、【設問5】【設問6】【設問8】

で1つ)、それより低い回答は全くなかった。表の一番右にあるのは平均点で、「非常にそう思う」を5点、最も低い「全くそう思わない」を1点と計算した結果である。最も高かったのは「【設問9】授業全体を通して、異なる文化や価値観に対する興味関心をもつようになった。」(4.62)で、最も低かったのは「【設問4】「国内の日本語教育事情」(第4.5回)の講義を通して、外国人施策や世界情勢など、外国人や日本語教育を取り巻く社会状況に関する一般的な知識を修得することができた。」(4.27)、その差は0.35で、全体として大きな差は見られなかった。全部の平均点の平均を計算すると4.39であった。

「日本語教育入門」の7つの設問を「報告」で示された資質・能力の3つのカテゴリーに分けると、【知識】が【設問3】【設問4】【設問5】、【技能】が【設問7】、【態度】が【設問6】【設問8】【設問9】に対応する。

最も高かった「【設問9】授業全体を通して、異なる文化や価値観に対する興味関心をもつようになった。」(4.62)は【態度】に属する。平均点は今回のアンケートで最も高い点数で、54人中の34人(63.0%)が「非常にそう思う」を選んだというのは、やはり達成感が高いと言えよう。本学日本語教師課程は全学部生を対象に1回生から履修可能で、多くが1回生のうちに必修科目の大半を履修する。科目名にあるようにこの科目は「入門レベル」であり、まず「興味を喚起する」ことに重きを置いている。「興味関心をもつ」という【態度】の涵養は、学びの基本と言えるだろう。

また、大きな差とは言えないが、【知識】に関する設問と【態度】に関する設問を対比してみると、【知識】に関する【設問3】(4.32)、【設問4】(4.27)、【設問5】(4.29)より、【態度】に関する【設問6】(4.43)と【設問8】(4.49)【設問9】(4.62)の点数の方が高い傾向が読み取れる。ここから、【知識】の修得よりも【態度】の涵養において履修生が比較的高い達成感を得たという特徴が窺える。2.1で述べたように、「報告」で示された資質・能力は、「知識」「技能」のみではなく「態度」を含む、「人間の全体的な能力としてのコンピテンシー」(松尾, 2017)に通底する概念をもつ。履修生がそうした新しい能力観に即応するかのような回答をしたことは、注目に値する。

一方【設問7】は【技能】に関する設問で、平均点は4.31とそれほど高くなかった。ここでは「どちらでもない」の回答が3つあり、今回のアンケート結果で「どちらでもない」が一番多かった。これは、設問文が「学習者の理解に応じて日本語を分かりやすくコントロールする能力を修得することができた」となっていることと関連するのではないと思われる。履修生は初めて「やさしい日本語」を作成してみて、主に難しさを実感し「修得することができた」とまでは感じられなかったのではないだろうか。

〈表4〉①「資質・能力」に関するアンケート 調査結果 「日本語教育入門」

【知識】【設問3】「海外の日本語教育事情」(第2回)や「国内の日本語教育事情」(第3回)の講義を通して、個々の学習者の来日経緯や背景を理解するための知識を修得することができた。	選択肢と点数	回答数	%	平均点
	非常にそう思う(5)	19	35.2	4.32
	そう思う(4)	33	61.1	
	どちらでもない(3)	2	3.7	
	そう思わない(2)	0	0.0	
	全くそう思わない(1)	0	0.0	
計	54	100.0		
【知識】【設問4】「国内の日本語教育事情」(第4, 5回)の講義を通して、外国人施策や世界情勢など、外国人や日本語教育を取り巻く社会状況に関する一般的な知識を修得することができた。	選択肢と点数	回答数	%	平均点
	非常にそう思う(5)	15	27.8	4.27
	そう思う(4)	39	72.2	
	どちらでもない(3)	0	0.0	
	そう思わない(2)	0	0.0	
	全くそう思わない(1)	0	0.0	
計	54	100.0		
【知識】【設問5】「国内の日本語教育事情」(第3, 4, 5回)や「多文化共生」(第11回)の講義を通して、国や地方公共団体の多文化共生及び国際協力、日本語教育施策に関する一般的な知識を修得することができた。	選択肢と点数	回答数	%	平均点
	非常にそう思う(5)	17	31.5	4.29
	そう思う(4)	36	66.7	
	どちらでもない(3)	1	1.9	
	そう思わない(2)	0	0.0	
	全くそう思わない(1)	0	0.0	
計	54	100.0		

【態度】【設問6】「日本語教育史」(第6, 7回)や授業全体を通して、日本語そのものの知識だけでなく、歴史、文化、社会事象等、言語と切り離せない要素を合わせて理解し、教育実践に活かそうと考えるようになった。	選択肢と点数	回答数	%	平均点
	非常にそう思う(5)	25	46.3	4.43
	そう思う(4)	28	51.9	
	どちらでもない(3)	1	1.9	
	そう思わない(2)	0	0.0	
	全くそう思わない(1)	0	0.0	
計	54	100.0		

〈表4〉②「資質・能力」に関するアンケート 調査結果 「日本語教育入門」

【技能】【設問7】「やさしい日本語」の講義(第11回)とワークショップ(第13, 14回)を通して、学習者の理解に応じて日本語を分かりやすくコントロールする能力を修得することができた。	選択肢と点数	回答数	%	平均点
	非常にそう思う(5)	20	37.0	4.31
	そう思う(4)	31	57.4	
	どちらでもない(3)	3	5.6	
	そう思わない(2)	0	0.0	
	全くそう思わない(1)	0	0.0	
計	54	100.0		
【態度】【設問8】授業全体を通して、言語・文化の相互尊重を前提に、学習者の背景や現状を理解するようになった。	選択肢と点数	回答数	%	平均点
	非常にそう思う(5)	28	51.9	4.49
	そう思う(4)	25	46.3	
	どちらでもない(3)	1	1.9	
	そう思わない(2)	0	0.0	
	全くそう思わない(1)	0	0.0	
計	54	100.0		
【態度】【設問9】授業全体を通して、異なる文化や価値観に対する興味関心をもつようになった。	選択肢と点数	回答数	%	平均点
	非常にそう思う(5)	34	63.0	4.62
	そう思う(4)	20	37.0	
	どちらでもない(3)	0	0.0	
	そう思わない(2)	0	0.0	
	全くそう思わない(1)	0	0.0	
計	54	100.0		

続いて、補足データとして自由記述回答（【設問10】「全ての授業の中で特に印象に残った内容などがあったら書いてください。」）を活用する。複数に跨る回答を書いた者もいたため複数回答として集計した。〈表5〉に示したように、「日本語教育史2（戦時中占領地で日本語教育に携わった先輩たちの手記等を読む）」（回答数：9）、「やさしい日本語」（回答数：9）、「ドキュメンタリー番組（外国につながる子どもたちへの支援）視聴」（回答数：5）が多かった。これらは教科書<sup>6)</sup>の内容にプラスした特別プログラムに相当する。これを選択肢回答の設問と重ね合わせると、【設問6】「日本語教育史」（第6,7回）（平均点4.43）、【設問7】「やさしい日本語」の講義（第11回）とワークショップ（第13,14回）」（平均点4.31）、【設問8】「(中略)学習者の背景や現状を理解するようになった。(=ドキュメンタリー番組視聴)」（平均点4.49）に概ね該当し、平均点が比較的高かった設問である。ここから、教科書を講読するだけでなく、履修生が日本語教育の歴史や学習者の背景・現状などを、より現実感をもって理解できるように仕掛けや、実際に実践に取り組むような授業内容が、履修生の理解や態度にプラスの影響を与える可能性があると言える。

なお、自由記述回答はもう一問、「この授業で改善した方がよいと思ったことなどがあったら教えてください」というものもあったが、「資質・能力」に関する回答はなかったため、ここでは触れないこととする。

〈表5〉「日本語教育入門」 自由記述回答（複数回答）

【設問10】全ての授業の中で特に印象に残った内容などがあったら書いてください。		
回答		回答数
日本語教育史2（戦時中占領地で日本語教育に携わった先輩たちの手記等を読む）	第7回	9
やさしい日本語	第11 - 13回	9
ドキュメンタリー番組（外国につながる子どもたちへの支援）視聴	第10回	5
ゲストスピーカー講義	第9回	1
外国人支援に関するサイト検索	第14回	1

### 3.2 「言語と教育」履修生に対するアンケート結果

〈表6〉①②は、「言語と教育」の履修生を対象とする「資質・能力」に関するアンケートの結果である。「日本語教育入門」と同様に、「非常にそう思う／そう思う」にはほぼ回答が集中しているが、「どちらでもない」の回答が【設問8】【設問11】【設問12】にそれぞれ1つずつある。

最も平均点が高かったのは「【設問10】「教科書分析」(第5, 7, 8回)の講義を通して、主教材を分析し、学習者に応じた内容の主教材を選択するために必要となる知識を修得することができた。」(4.43)で、最も低かったのは「【設問11】「リライト教材」(第10回)、「教材作成」(第12, 13, 14回)の講義を通して、学習者に応じた教材を活用または作成することができるようになった。」と「【設問12】「リライト教材」(第10回)や「教室談話分析」(第11回)の講義を通して、学習者の理解に応じて日本語を分かりやすくコントロールする能力を修得することができた。」(4.17)で、その差は0.26、「日本語教育入門」の設問間の差よりさらに差が小さかった。全部の平均点の平均を計算すると4.29で、「日本語教育入門」の4.39よりやや低かった。

「言語と教育」の6つの設問を「報告」で示された資質・能力の3つのカテゴリーに分けると、【知識】が【設問8】【設問9】【設問10】、【技能】が【設問11】【設問12】、【態度】が【設問7】である。

最も平均点が高かった【設問10】は【知識】に属する。これに該当するのは教科書分析に取り組んだ回で、3回に渡って対象者がはっきり異なる日本語初級教科書4つを比較するというものである。日本語教師課程で指定した共通の教科書の該当部分を講読するのではなく、特別プログラムである。実際の教科書を詳細に読み込むという実践により近い課題に取り組んだことで、履修生たちは知識の修得を越えた実践に近い感覚を得たのではないかと考える。

「日本語教育入門」では、【知識】に関する設問より、【態度】に関する設問の方が、平均点がやや高かった。「言語と教育」では、【知識】に属する【設問8】【設問9】【設問10】の中で、上述の、より実践に近い課題に取り組み現実感があったと思われる【設問10】を除けば、やはり大きな差とは言えないが、

【知識】の【設問8】(4.26)【設問9】(4.30)よりも、【態度】の【設問7】(4.39)の方が、平均点がやや高く、「日本語教育入門」と同じような傾向が見られる。

〈表6〉①「資質・能力」に関するアンケート 調査結果 「言語と教育」

【態度】【設問7】「日本語教師という仕事」(第2回)の講義を通して、日本語教育および日本語教師に関する専門性とその社会的意義について理解することができた。	選択肢と点数	回答数	%	平均点
	非常にそう思う(5)	9	39.1	4.39
	そう思う(4)	14	60.9	
	どちらでもない(3)	0	0.0	
	そう思わない(2)	0	0.0	
	全くそう思わない(1)	0	0.0	
計	23	100.0		
【知識】【設問8】「コースデザイン」(第3回)の講義を通して、目的・目標に沿った授業を計画・実行するためのコースデザインに関する基礎的な知識を修得することができた。	選択肢と点数	回答数	%	平均点
	非常にそう思う(5)	7	30.4	4.26
	そう思う(4)	15	65.2	
	どちらでもない(3)	1	4.3	
	そう思わない(2)	0	0.0	
	全くそう思わない(1)	0	0.0	
計	23	100.0		
【知識】【設問9】「言語能力の評価方法」(第4回)の講義を通して、学習者の日本語能力を測定・評価するために必要となる基礎的な知識を修得することができた。	選択肢と点数	回答数	%	平均点
	非常にそう思う(5)	7	30.4	4.30
	そう思う(4)	16	69.6	
	どちらでもない(3)	0	0.0	
	そう思わない(2)	0	0.0	
	全くそう思わない(1)	0	0.0	
計	23	100.0		
【知識】【設問10】「教科書分析」(第5, 7, 8回)の講義を通して、主教材を分析し、学習者に応じた内容の主教材を選択するために必要となる知識を修得することができた。	選択肢と点数	回答数	%	平均点
	非常にそう思う(5)	10	43.5	4.43
	そう思う(4)	13	56.5	
	どちらでもない(3)	0	0.0	
	そう思わない(2)	0	0.0	
	全くそう思わない(1)	0	0.0	
計	23	100.0		



〈表6〉②「資質・能力」に関するアンケート 調査結果 「言語と教育」

	選択肢と点数	回答数	%	平均点
【技能】【設問11】「リライト教材」(第10回)、「教材作成」(第12, 13, 14回)の講義を通して、学習者に応じた教材を活用または作成することができるようになった。	非常にそう思う(5)	5	21.7	4.17
	そう思う(4)	17	73.9	
	どちらでもない(3)	1	4.3	
	そう思わない(2)	0	0.0	
	全くそう思わない(1)	0	0.0	
	計	23	100.0	
	選択肢と点数	回答数	%	平均点
【技能】【設問12】「リライト教材」(第10回)や「教室談話分析」(第11回)の講義を通して、学習者の理解に応じて日本語を分かりやすくコントロールする能力を修得することができた。	非常にそう思う(5)	5	21.7	4.17
	そう思う(4)	17	73.9	
	どちらでもない(3)	1	4.3	
	そう思わない(2)	0	0.0	
	全くそう思わない(1)	0	0.0	
	計	23	100.0	

では、【設問10】の回答結果に見られたように、実践により近い課題に取り組んだことが平均点を少し上げたとなると、初歩的な実践に実際に取り組んだ、【技能】に属する【設問11】【設問12】で平均点が低かった(どちらも4.17)のをどのように考えたらよいだろうか。4.17という平均点は今回のアンケート結果で一番低い数値である。【設問11】【設問12】で「どちらでもない」の回答が1つずつあることも影響しているようである。これは、やはり「日本語教育入門」で【技能】に関する設問の平均点がそれほど高くなかったことと呼応するのではないだろうか。これは、設問文が【設問11】で「学習者に応じた教材を活用または作成することができるようになった」、【設問12】で「学習者の理解に応じて日本語を分かりやすくコントロールする能力を修得することができた」となっており、初めての実践の疑似体験では「作成できるようになった」「修得することができた」といった達成感までは届かなかつたからではないかと思われる。

また、この【設問11】【設問12】で平均点が4.17と、この調査で最も低い平

均点が二つ重なっているなどが影響して、「言語と教育」全体の平均点（4.29）が「日本語教育入門」（4.39）より低くなったと考えられる。それは入門レベルの科目と、入門レベルの知識等の基礎の上に実際に指導法を学ぶ科目との違いであるとも言えよう。

〈表7〉「言語と教育」自由回答（複数回答）

【設問10】全ての授業の中で特に印象に残った内容などがあったら書いてください。		
回答		回答数
リライト教材	第10、12回	6
教材作成	第11 - 14回	2
教科書分析	第5 - 7回	1
日本語教師の資質/役割	第2回	1
ゲストスピーカー講義	第6回	1
4技能の指導（初級）	第9回	1

続いて、補足データとして自由記述回答を活用する。〈表7〉に示したように、「リライト教材」（回答数：6）、「教材作成」（回答数：2）が比較的多かった。その他1名だけではあるが、「教科書分析」「日本語教師の資質/役割」「ゲストスピーカー講義」「4技能の指導（初級）」という回答もあった。

2名以上の回答があった「リライト教材」（第10、12回）、「教材作成」（第11-14回）は、教科書の講読ではなく実践により近い課題に取り組んだ特別プログラムで、どちらも【技能】に属する。これを選択肢回答の設問と照らし合わせると、【設問11】（平均点4.17）、【設問12】（平均点4.17）に対応する。この調査で最も平均点が低かった二つである。「印象に残った」という回答が多かったにも関わらず、「技能が修得できたか」と問われて平均点が低かったのはなぜだろうか。この「リライト教材」と「教材作成」は、日本語教師課程の最後の関門である教育実習に進むための重要な疑似実践課題として位置づけられる。学習者のレベルや背景を考慮しつつ日本語を客観的に分析して教材を作成することが求められる。入門レベルではないため採点も比較的厳しくしてい

る。履修生たちは「日本人だから日本語が分かっている、教えらえる」といった単純な安心感を覆され、実践の厳しさを知ったからこそ、これらの教材作成の課題が印象に残ったと回答したのではないだろうか。このように【技能】に関わる資質・能力に対する履修生の反応は一見矛盾しているようにも見えるが、履修生たちは「技能が修得できたか、できなかったか」といったような単純な振り返りではない、深く複雑な学びを得たと言えるのではないだろうか。

### 3. 考察および今後の課題

以上のように、日本語教師課程必修科目の中から、「日本語教育入門」と「言語と教育」の履修生を対象にアンケート調査を行い、「報告」で示された資質・能力がどの程度養成・修得できたのかを調べた。分析の結果、まずほぼ全ての回答が5段階の上から2番目までに集中していたことから、「報告」で示された資質・能力が概ね養成・修得でき、履修生から比較的高い評価を得ていると言ってよいだろう。

「報告」で示された資質・能力は、【知識】【技能】【態度】の3つのカテゴリから構成されている。その中で、【知識】より、【態度】の方を履修生がより修得できたと感じている傾向が窺えた。これは、「報告」で示された資質・能力が「知識」「技能」のみではなく「態度」を含む「人間の全体的な能力としてのコンピテンシー」（松尾, 2017）として捉えられていることから、注目に値する。このように履修生が新しい資質・能力観を反映する回答をしたことは、本学が「報告」に基づく日本語教師課程を実施した成果と言えよう。

一方、【技能】については、教師養成の初期段階にある履修生にとって、技能を修得できたとまで実感できるには至らなかったことが窺えた。しかし、実感できなかったとしても、印象に残ったという自由記述回答が多かったことから、履修生が技能を磨く課題を通じて単純ではない学びを得たことは確かなようである。

「報告」では、教師養成段階で求められる資質・能力を【知識】【技能】【態

度】の3つのカテゴリーに分けて詳細に提示している。しかしそれらの資質・能力を実際の授業でどのような教材や資料を使って、どのように履修生に働きかけて講義するのかなど、つまり具体的な内容は、当然ながら担当教員の創意工夫に任されている。筆者は特に資質・能力の中の【態度】を養成するためには、教科書の講読だけではなく、日本語教育や学習者の実情が具に伝わるような内容が必要であると考えた。具体的には、日本語教育の歴史や学習者の言語的文化的背景、現役日本語教師や外国人支援に関わっている人の実際の仕事の様子などを知ることができる特別プログラムを組み込んだ。こうした単なる座学ではない内容に履修生たちが心を揺さぶられた様子は、特に自由回答記述の結果に表れている。

「報告」が発表されて以来、多くの日本語教師養成機関で新しく示された資質・能力の養成に取り組んでいる。他の養成機関、養成課程では、どのような考えの下、どのような工夫をして授業を組み立てているのだろうか。義永(2020)は、「報告」で示された資質・能力の捉え方や教育方法が要素主義、即ち要素に分けて捉えてしまうことの可能性を指摘した。確かに単に細分化されたチェックリストのように使われるのは本末転倒であろう。そうではなく、「報告」で示された資質・能力を核として教師養成に関わる教員たちがつながれば、多くの多様なアイデアを共有できる可能性が広がる。実際、筆者は関西地域の大学で日本語教師課程を担当する教員たちの自由意思によって結成されたネットワーク<sup>7)</sup>に参加し、こうした動きの中にすでに身を置いている。筆者は、資質・能力は細分化し具体化し得るものであると同時に統合的に捉え得るものであると考える。そして、細かく例示された資質・能力をそれぞれの教師教育の場でどのように具体的に養成しているのか、また統合的な資質・能力をどのように捉えているのかを共有し議論することによって、よりよい教師養成へのヒントが得られると考える。

本学の日本語教師課程は始まったばかりで、取り組むべき課題は多い。今回のアンケート調査は2021年度前期履修生のみを対象として行われたもので、あくまで予備的な調査であり、今後も継続して資質・能力がどの程度養成でき

たのかを継続的に把握していく。そして、杉本・松岡（2021）が取り組んだように、課程の最終段階である教育実習を経た履修生を対象に調査する必要がある。また、インタビューなどのデータを分析して履修生の意識の変化を詳細に可視化するなど多角的な探求にも取り組みたい。

## 註

- 1) 「令和元年（2019年）末現在における在留外国人数について」. 法務省ホームページ.  
[https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/nyuukokukanri04\\_00003.html](https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/nyuukokukanri04_00003.html)
- 2) 「国内の日本語教育の概要 令和元年（2019年）」. 文化庁ホームページ.  
[https://www.bunka.go.jp/tokei\\_hakusho\\_shuppan/tokeichosa/nihongokyoiku\\_jittai/r01/](https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/nihongokyoiku_jittai/r01/)
- 3) 「2019年（令和元年）度外国人留学生在籍状況調査結果」. 日本学生支援機構ホームページ.  
[https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl\\_student/data2019.html](https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student/data2019.html)
- 4) 「報告」で示された資質・能力については、2.1で後述する。
- 5) 「言語と教育」では、「日本語教育入門」にはない、教職課程との並立履修に関する質問など3つの設問を設定したが、本稿の目的とは直接関わらないため、ここでは触れない。
- 6) 日本語教師課程必修科目では、共通の教科書として、坂本・川崎・石澤（2017）の全4巻を採用している。
- 7) 2018年に結成した「日本教師教育者ネットワーク」というグループである。

## 参考文献

- 坂本正・川崎直子・石澤徹監修 鳩貴子・松本恭子編（2017）. 日本語教育への道しるべ. : 東京凡人社. 1巻～4巻.
- 杉本香・松岡里奈（2021）. プロジェクト・ワーク型日本語教育実習で養成できる資質・能力とは. 2021年度日本語教育学会春季大会予稿集. 214-219.
- 文化審議会国語分科会.（2019）. 日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改訂版.
- 松尾知明.（2017）. 21世紀に求められるコンピテンシーと国内外の教育課程改革. 国立教育政策研究所紀要. 146, 9-22.
- 義永未央子.（2020）. 日本語教師の資質・能力観の変遷と今日的課題. 社会言語学.（23）. 1, 21-36.

## キーワード

日本語教師課程、文化審議会、日本語教師に求められる資質・能力